

## ヘブライズム型宗教とヘレニズム型宗教

宗教と文明という題を与えられ、とまどいを感じている。宗教と文明——この二つは対立する言葉か、同義語か。

文明の歴史の初期においては、この二つはほとんど同義語だったように思われる。古代エジプトでは国家の指導者は王であると同時に神官であり、その政治は神権政治と呼ばれた。日本でもむかしは政治は「まつりごと」と呼ばれた。「まつり」は宗教行事であるから、政治は宗教と密接に結びついていたことになる。

同じことはインドでも見られた。ヒンドゥー教は宗教であるだけでなく、人々の日常の生活までも規制するものであった。ヒンドゥー教の古典『マヌ法典』は、宗教の教義にもとづきながら、法律を述べている。たとえば、聖典『リグ・ヴェーダ』にはカースト制度の起源についてつぎのような説明がある。原人の口から祭司階級が生れ、腕から戦士階級が生れ、脛から庶民階級が生れ、足の裏から隸民階級が生れた、と。『マヌ法典』(一一三—一)はこ

の教義を前提にして階級制度の厳格な規定をおこなっているのである。

このように、古代世界においては、あらゆるところで祭政一致が見られた。そして、古代世界では、政治はほとんど文明をカバーしていたと考えられる。政治は今日でこそ経済、法律、芸術、文学、自然科学などと並ぶ、多くの文化現象の中の一つに過ぎないが、古代にあっては文化のこのような細分化は存在しなかった。祭政一致とは、宗教と文明の一致にほかならなかったといつても過言ではないだろう。

では宗教が文明から切り離されるようになったのは、いつからか。くわしく調べたわけではないが、わたしはキリスト教の出現の中にその端緒を見ることができるよう思う。新約聖書に「カエサルのはカエサルに、神のものは神に」(マルコ、一二—一

定方 晟

七) というキリストの言葉が記されている。これが宗教と政治の分離のはじまりであつて、今日の政教分離の思想の淵原をここに求めることができるように思うのである。

しかし、上記の言葉はキリスト教が政治から切り離されたことは意味しても、文明から切り離されたことまでは意味しない。さきほどわたしは「政治はほとんど文明をカバーしていた」といったが、キリスト教が誕生した時代の環境であるローマ世界では事情はことなっていた。ここでは文学、歴史、芸術、自然科学等がかなり重要性を増し、政治と並ぶ独立的な分野を形成していた。したがってキリスト教は政治から切り離されても、文明の他の分野とはつながつていた。

近世にいたり、キリスト教が自然科学から切り離されるようになってようやく、キリスト教は文明から切り離されたといつても過言でない状態が出現した。人間生活におけるキリスト教の守備範囲は次第にせばまり、政治や自然科学などのほうが人類の生活の大部分を支配するようになり、文明という言葉はそちら側に適用されるようになった。そして、今日、宗教の代表はキリスト教でとらえられるから、宗教と文明は分離した存在と考えられるようになり、両者の関係を論じるという発想が生じるようになったと思われる。以下のわたしの発表はこのような考えを前提にしている。

「宗教と文明」という今回のテーマが意味するものをわたしなりに

に推察すれば、文明は宗教から切り離されたままでよいかどうかを論ぜよということであろう。このテーマの発案者の、これに対する答えは多分ノーであろう。わたしの答えも、どちらかといえはノーである。「どちらかといえは」という曖昧ない方をするのは、宗教の概念が曖昧だからである。宗教によつては、切り離してもよいとさえわたしは思っている。

世界にはさまざまな宗教がある。宗教を論じるときに、諸宗教を一括して宗教と呼ぶのは妥当でない。そこで私は世界の主な諸宗教を分類してみようと思う。話を単純にするために、大きく二つに分類することにする。一つはヘブライズム型宗教であり、一つはヘレニズム型宗教である。前者にはユダヤ教、キリスト教、イスラム教が入る。後者にはギリシャ哲学やインド哲学が入る。<sup>(1)</sup>わたしが話をあえて単純化するのには、そうすることによつて、明快な議論や具体的結論を引き出しやすくするためである。

ここで説明しておくべきことがある。わたしがヘレニズム型宗教というとき、それはセラピス信仰やミトラ信仰を意味するのでなく、プラトン哲学やエピクロス学派、ストア学派などを意味する。すなわち、ヘレニズムの特徴をなす、知性を基礎とする宗教や思想をいう。このことをはっきりさせるため、マシュー・アーノルドの言葉を引用しておこう。「ヘレニズムとは美と知性のギリシャ文化全般を表わす。ヘブライズムは律法、道徳、救済を象徴する」(「ヘブライズムとヘレニズム」『教養と無秩序』一八六九、所収)。(傍点、定方)

また、宗教に哲学を含めることに異義を唱えるひとがいるだろうから、それにもあらかじめ答えておこう。わたしはあるものが宗教とみなされうる最低限の条件は、それが死の意味を説明することであると考える。宗教の他の特徴である「畏れ」や「天国（彼岸）」の観念などは、すべてここに収斂させることができる。だから、ある哲学が死の意味を説明すれば、それは宗教であるとわたしは考える。わたしの考えが荒唐無稽でないことは、宗教というより哲学のようにみえる仏教が宗教として正式に認められていることからわかる。

そこで、ヘブライズム型宗教とヘレニズム型宗教の違いについて述べたい。両者の本質的な違いはなにか。これは難しい問題であるが、私はこれも単純化して述べよう。

ヘブライズム型宗教は神を中心とする宗教である。ヘレニズム型宗教は人間を中心とする宗教である。人間を中心に考える文化はヒューマニズムと呼ばれるから、神を中心に考える宗教はゴツドイズム、またはシーイズム (theism) と呼ばれてよいだろう。この基本的な違いから、両者の他の違いのすべてが現れる。

まず、ヘレニズム型宗教は自分で考えることに信頼をおく。人間の理性を信じる。ヘブライズム型宗教は判断を神あるいはその代理者にゆだね、自分で考えようとしなない。理性を放棄する。

つぎに、ヘレニズム型宗教の信徒は人間を尊重し、高貴な存在になることを理想とする。ヘブライズム型宗教の信徒は神に服従

し、みずから奴隷となることを喜ぶ。かれらが「しもべ」という言葉を好んで使い、羊飼いと羊の関係においては自分たちを羊にたとえることが、それをよく示している。

またつぎに、ヘレニズム型宗教は自由を尊ぶ。人間は能力をもつと考えるから、人間がめいめい能力を磨き、その結果、差が生じるのを当然と考える。ヘブライズム型宗教は平等を尊ぶ。神は絶大の力をもつから、そのまえに立つ人間の優劣はとるにたらない。自由より平等を優先する。

ここで自由と平等が対立的な概念であることを明らかにしておきたい。両者はどちらも人間にとつて望ましいものと考えられている。ところが、両者は両立しがたい。自由を百パーセント認めたら、平等は存在しえない。平等を百パーセント実現しようとしたら、自由は存在しえない。したがって、賢明な社会は、その中間の立場を採用する。だれもがある程度自分の自由を犠牲にし、その代り残る自由を他人から犯されないといい保証をえて、平等の状態に近づこうとするのである。

自由と平等という二分法を適用すれば、共産主義が一種のヘブライズム型宗教であることがわかる。共産主義は平等を理想とするが、それがさきごろ破綻を見せたのは、平等を徹底させようとして自由を犠牲にしたためである。共産主義はキリスト教と本質的に相反するように見えるが、それは小さなスケールで見るとあり、大きなスケールで見れば、両者の抗争は兄弟喧嘩のよう

なものであることがわかる。

資本主義は自由を重んじる点でヘレニズム型宗教の仲間である。マックス・ウェーバーはプロテスタンティズム、すなわちヘブライズム型宗教に資本主義社会を形成する原動力をみたが(「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」)、私はこれについてつぎのように考える。もしプロテスタンティズムの中に資本主義を発達させる要因があったとすれば、それはプロテスタントの中のヘブライズムの要素とは別の要素であろう。たとえば北部ヨーロッパの人には勤勉さがあるのではないか。それがたまたま技術の発達という外的要因と結びついたのではないかと。もしヘブライズムの要素が資本主義を発達させたのならば、カトリシズムがそうしなかったのはなぜか。イスラム教がそうしなかったのはなぜか。

仏教は自由を重んじる点で明らかにヘレニズム型宗教に属する。仏教は決してドグマをひとに押しつけない。ブッダの最後の言葉は、真理をよりどころにせよ、自分をよりどころにせよ、ということであった。

仏教はカースト制度を批判したではないか、平等を重んじたではないかというひとがいるかも知れない。しかし、仏教は絶対的な平等を主張したわけではない。ひとは生れによってバラモンになるのではない、行為によってバラモンとなるのであるといったのである。つまり、行ないによって差が生じることを認めたのである。

最後に、二つの型の宗教を寛容・非寛容という面から見てみよう<sup>(2)</sup>。ヘブライズム型宗教は非寛容である。神やその教えは絶対的であやまないという考えがあるから、それらに反するものを直ちに誤りとし、弾劾する。ヘレニズム型宗教は寛容である。それはこの宗教が人間の考察から出発するからだと思われる。人間を中心とする宗教は人間を傲慢に導くとする考えは短絡的である。人間を考察することは、人間の弱点を知ることであり、人間が過ちうる存在であることを理解することである。ここには絶対化するものはなにもない。

わたしはギリシャの歴史家ヘロドトスがインドのある部族の習慣のことを記した記事を読んだことがある。かれはそのことを記したあと、こうつけ加えている。「どこの国の人間でも、自国の習慣を格段にすぐれたものと考えている、だからそれを嗤ってはいけない」(歴史「三二—三八」)。多くの国が中華思想から抜け出ることができなかつた紀元前五世紀という時期に、このような発言をするひとがいたことに私は感銘をうける。自己をこのように相対化して考えることができるのは、自己(人間)についての優れた省察があるからである。

わたしはソクラテスのいわゆる「無知の知」にもギリシャ人の智慧を感じる。人間が自分の無知を知ることが、われわれを人間不信に陥らせるどころか、かえって、人間に対する信頼と希望に導く。人間を絶対化せず、しかも人間の可能性を信じる。これがヘレニズム型宗教の寛容さと理想追求の淵源であるとわたしは考

える。

今後の文明に役立つのはどちらの型の宗教か。合理主義を基本とし、人間の尊厳や自由を重視する現代の文明にはヘレニズム型宗教がふさわしいと思われる。現代の文明は平等をも重視するので、この点ではヘブライズム型宗教にも活躍の余地があるが、ヘブライズム型宗教は他方でその独善的、全体主義的な性格によって、多くの禍を世界にもたらしている。そもそもヘブライズム型宗教の欠陥はその固定した教義にあり、進歩ないし変化を基調とする現代文明からの乖離を止めることができない。これに対し、ヘレニズム型宗教は試行錯誤の上に成り立つことを自ら認めているので、あやまちに気がつけば、修正することができる。この修正可能という性格がヘレニズム型宗教の未来を約束しているように見えるのである。

以上のように述べると、わたしがヘブライズム型宗教に何も期待していないようにみえるだろう。しかし、私はキリスト教には一つの期待を抱いている。というのは、キリスト教は愛の教えを有し（これはヘレニズムの影響であるとわたしは考える）、過去（Ⅱ中世）の非寛容な態度を捨てている。

一方、イスラム圏に原理主義が台頭し、その独善と非寛容で世界の平和をおびやかそうとしている。旧ソ連では共産主義の廃虚の上にイスラム教が復活したが、わたしによれば両者はともにヘ

ブライズム型宗教であるから、両者のあいだでの移行が容易におこなわれるのであろう。イスラム、イスラム原理主義、共産主義は全体主義的な性格によって共通している。

ユーゴ紛争をみると、キリスト教諸国が反イスラムの立場で動いていないことに気づく。その陰には政治的利益や宗派的対立（プロテスタント、カトリック、東方教会）が潜んでいるかも知れないが、かつての十字軍戦争のようにならないのは、キリスト教国が偏狭な自己中心主義を脱したことの現われと考えたい。それに反し、イスラム側が、ともすれば汎イスラム的な動きを示そうとすることに私は懸念を抱く。

わたしはイスラム教が寛容な、開かれた宗教になることを願う。イスラム教がそうなるために役立つのがキリスト教ではないかと考える。寛容な宗教に仏教があるが、仏教はヘレニズム型宗教に属し、思想的にイスラム教と違いすぎるので、イスラム教に影響を与えることは期待できない。これに対し、キリスト教徒はイスラム教徒によって同じ啓典の民と認知されているから、イスラム教徒に影響を与えうる可能性がある。これはキリスト教にいわばワクチンの役割を期待することである。

#### 註

(1) 会場の発言のなかに、この分類では未開の宗教の占める位置がないというのがあった。それに対してわたしはつぎのように答えた。「この大会は文明学会の大会である。文明学

と史学科の違いが、つねづね問題にされているが、違いの一つとして取りあげられるのが、前者は現在と未来を見ずして研究すること、後者は過去に視点をすえて研究すること、ということである。わたしは文明学会の大会にふさわしく、現在と未来に向って意味をもちうる宗教のみを問題にした」

(2) わたしは「寛容」を「望ましいもの」と考えている。他の人々もそうであると思っていた。ところが、「寛容」が善であるか悪であるか分からないという意見がある。中田考氏はいう。

「宗教における寛容」とは、およそ学問的に稔りある議論の期待できないテーマの一つである。その一因は「寛容」の概念規定の曖昧さ及び、「寛容」が善であり、「非寛容」が悪であるとの未だ証明されない前提にある。(中田氏「イスラームにおける寛容——クルアーンと法学に基いて——」、竹内・月本編「宗教と寛容」、大明堂、一九九三、一九六頁)

このような見解に出合うのはわたしは始めてであるが、それがイスラームを擁護しようとする人(?)から出されたことには納得がいく。そして、その点にこそ、わたしはイスラームの危険性を見るのである。

わたしの考えでは、「宗教における寛容」は、まさに学問的に稔りある議論が期待できるテーマの一つである。しばらく前に共産主義と資本主義が激しく対立しあったこと、いままたセム系宗教の原理主義が妥協のない闘争を始めようとしていることを思うにつけ、寛容とは何かを論じることは、たとえ結論が出ないにせよ、人々の注意を「寛容」に向けさせる

意味で、大きな稔りが期待できるのである。

また寛容の概念規定は決して難しくない。わたしの考えでは、それは「自分の意志を他人に押しつけないこと」である。「寛容」が善であり「非寛容」が悪であるとは未だ証明されていないと中田氏はいうが、わたしはこう考える。善悪の概念は抽象的で、善意の判断に要請される客観的真理性は得がたいから、この概念で「寛容」「非寛容」を分けることはなるほど難しい。しかし、「望ましい」か「望ましくない」かという具体的に主観的な判断でならば、多くの人々は「寛容」のほうが「望ましい」とすることに躊躇しないだろう。

中田氏は「不干渉が相手の失敗、破滅につながると確信している場合、放任することは「寛容」といえるであろうか」(一九七頁)と述べている。寛容を放任に結びつける中田氏の意見には賛同しがたい。寛容についてのわたしの定義の「押しつけないこと」の句に注意していただきたい。これは「放任すること」を意味しない。この寛容は、進んで忠告あるいは援助することを妨げない。相手がそれを受け入れないときは、そうすることをやめる。これが私のいう寛容である。相手が喜んで受け入れてこそ、忠告や援助は相手を幸福にするからである。相手が受け入れないときは、受け入れる機が熟するのを待つしかない。

儒教や仏教に「自分が欲しないことを人にしてはならない」という教えがある。キリスト教には「自分が欲することを人にしてやりなさい」という教えがある。前者を消極的として「白銀律」(Silver Rule)と呼び、後者を積極的として「黄金律」(Golden Rule)と呼び、後者のほうを高く評価する考え

があるが、これは洞察力を欠いた考えである。前者は人々の幸福を実現するための最低限度の行動規範を示したものであり、相手が喜んで受け入れる場合に進んで援助することを排除するものではない。これに対し、後者は相手が望んでいる場合に援助することのほかに、相手が望まない場合にそうすることを含みうる。これは善意の押しつけであって、多くの人はそれによってプライドが傷つけられるものである。だから前者こそ最低限度の、したがって普遍的に妥当する、行動規範を示すという智恵を表わしたものといえる。